

天眼鏡

川崎平右衛門に学び行動しよう

取り組んでいる活動の一つに川崎平右衛門顕彰会・研究会がある。川崎平右衛門といっても知る人は少ないだろう。江戸時代中期、武蔵野新田開発を成功に導いた人物で、その後、美濃三川の治水対策、石見銀山の再興にも当たっている。その功績と人徳を讃えてたくさんの石碑等が残されているが、平右衛門が最も重視にしたのが協同の心である。日本における協同運動の祖として知られる二宮尊徳や大原幽学よりも、さらに 100 年前の話である。

もう少し具体的に述べれば次のようになる。1707 年に先の東日本大震災に匹敵する宝永大地震が発生し、これに続いて富士山が大噴火した。飢饉の続発と復興事業にともなう幕藩財政の悪化から、8 代将軍・徳川吉宗によって享保の改革への取り組みが開始された。この総責任者を務めたのが大岡越前守忠相で、その目玉が武蔵野台地での新田開発となる。開発は遅々としてすすまなかったことから、「世襲の役人に代えて、現場で復興事業に取り組んでいる農民・町人の中から優れた人材を抜擢」するとして新田世話役に任命されたのが平右衛門である。

もともと作物の栽培には適さない武蔵野台地を改良していくには、大量の肥料が必要であったが、百姓たちは貧しく肥料を購入することはかなわず、幕府も財政難で肥料代を補助することは困難であった。平右衛門は、農閑期には肥料が半値にまで下落することに目をつけ、この時を見計らって大量に肥料を買い付ける。一方で収穫物は商人の手に任せず、直接買い上げてやることによって有利販売する。このようにして肥料は半値で貸し渡し、収穫物は 2 割高で買い取り、貸し付けた肥料代は収穫物で返済させる。このための資金は、幕府から公金を借り入れ、これを商人たちに貸し出すことによって、元金には実質手を付けることなく、商人たちから得た利息をこれに充当。また、備蓄等をすすめる養い料組合の設立、畑を開きながらも作物が取

れないために逃げ出した農家が戻ってきた際の立ち帰り料の支給、飢饉に備えての稗蔵（ヒエグラ）の設置等に取り組んだ。

こうした取り組みと併行して、見ず知らずの人間が集まって作られた新田の村であるからこそ、村人たちは助け合い、百姓たちの話し合いによって自主的に物事を判断して進めることができるよう、百姓自身が協力し合う百姓組合ともいべき取組みを重視した。その他の手法も含めて、平右衛門は助け合う心、協同の精神を尊重し、百姓たちの力を引き出すことによって、新田開発を成功に導いたのであった。

この平右衛門の活動と思いこみ小金井市の市民が着目し、これに現代座代表で劇作家・演出家の木村快氏が加わってプロジェクトを組み、4 年にわたって史実等についての勉強を重ねたうえで木村氏が作った劇が「武蔵野の歌が聞こえる」である。市民がボランティアで切符を売り、受付や案内等を分担して、2014、15、16 年と本劇を上演し、大好評を博した。

その後、本劇を見て感動した協同組合関係者を含む多くの人たちが、もっと川崎平右衛門を世に知らせたい、協同の活動を展開していくきっかけにしたい等の思いを持って集まり始め、17 月 5 月に立ち上げたのが冒頭の会である。

農協をはじめとして協同組合に対する逆風が吹き荒れ、自己改革に取り組んでいる真っ最中である。組合組織そして事業の自己改革は必要であるが、あわせて大事なのが地域・現場レベルでの協同活動の活性化である。本会では研究会を開催しており、研究会が協同活動の活性化を考える“場”としての役割を果たせれば、と念願している。関心ある向きは（事務局）080-5895-3960 までご連絡願いたい。

（農的社会デザイン研究所・代表 蔦谷栄一）